

10月19日 柿

今日、F先生から柿をいただいた。ご実家から送られてきたものとのこと。つやつやしたその実を眺めながら、父親と山歩きした子どもの頃を思い出した。

気難しい人だったが、体の弱かった私を気遣ってか、何度も山歩きに連れて行ってくれた。確か、箕面だったと思う。紅葉狩りがてら滝までの溪流沿いを、リュックを背負って黙々と歩いた。途中、沢に下りた父が、透き通った水をすくって顔をジャブジャブと洗い始めた。私もまねをして冷たい水で顔を洗う。不意に父が水中の大きな石をひっくり返し始めた。赤茶色の生き物が逃げ出す。沢ガニだ。急いで小さな手のひらで覆う。当然のように爪で挟まれ、私は半べそをかいた。

滝の近くに何軒か茶屋があった。飲み物や土産物も売っている。父は私に、小枝に3つ4つ実のぶら下がった柿を買ってくれた。滝の前に座って二人でかじる。疲れた体に優しい甘みがしみた。

箕面では当時、行楽客のために駅前から滝のそばまで馬車を走らせていた。いや、走らせていたは言い過ぎか。のそのそと足の太い馬車馬が客車を引いていた。「カッポカッポ」とリズムを刻む蹄鉄。そして、滝の音。都会にはない“音”に包まれながらかじった堅い柿は、この上ないうまさだった。

